

南船北馬一団 大阪公演上演台本

「ななし」

作・柵瀬美幸

登場人物・男A（ヘルンと呼ばれる男）

女B（ヨハンナと呼ばれる女）

女C（マリーと呼ばれる女）

男1（ニコラと呼ばれる男）

女2（アンカと呼ばれる女）

女3（イリーナと呼ばれる女）

Scene・1

電車の中。どこの国を走っている電車なのかは、この中では明かされないことになっている。名義上、この電車を“かしこ行き”としておこう。何故なら、同じ線路の逆向きの電車“あしこ行き”が後のシーンに出てくるからである。

女Cが進行方向を向いた席の窓側に座っている。

そこに、女Bがやって来る。

女B あの、

女C ……

女B あの、すみません。

女C ……はい、

女B お疲れのところすみません。

女C ええ、

女B あ、やっぱりいいです。

女C え？

女B ごめんなさい。お休みされていたのに。

のかわからないじゃない。というか、謝るために邪魔しに来たことになってるのよ。

女B すみません。

女C だから、すみませんじゃないでしょう。

女B ……ごめんなさい、

女C ごめんなさいじゃなくて。何かあるでしょう？

女B 申し訳ありません。

女C だからそうじゃなくて……もう。

女B 为什么呢？

女C それはこっちの台詞よ。

女B すみません。

女C 何か言いたいことがあって、声を掛けたんでしょう？

女B そうだったんですが、もういいんです。すみません。

女C あなたは良くてもこっちは良くないの。あなたは私に声を掛けた。そうして、あなたは私の眠りを遮った。でしょう？

女B はい、ごめんなさい。

女C それは謝るためじゃなくて、何かあったからでしょう？ それが「もういいです」はないじゃない。違う？

女B どうすればいいんでしょう？

女C 座ったら？

女B はい。

女C 何が言いたかったの？ 最初のすみませんの後。声を掛ける動機よ、動機を聞いてるの。

女B ここに座ってもいいですか？

女C え？

女B そう聞きたかったんです。

女C どうぞ、座ったら。

女B はい。

女C けど、もういいのよね、あなたは。ということは、座りたくなくなったってことなのよね。

女B そういわけじゃ、

女B 見えないんです、何も。外に何があるのか、私たちの外側の世界が。

女C そんなことないでしょう。近くの壁や建物は一瞬にして過ぎ去るけど、遠くのもの
は見えるわ。

女B 特急だから。鈍行なら一駅ごとに停車する。けど、私たちはエクスプレスだから、
早くて当然なんです。

女C 途中下車はできないことがミソね。もちろん乗車もできないけど。

女B イエスノーもですね。

女C どういう意味？

女B 中間はないんですね。答えははっきりしなきゃ、ですね。

女C (笑)

女B 何ですか？

女C あなた変わってるわ。

女B そうですか。

女C だから悪いなんて言ってるわけじゃないのよ、念のため。

女B はい。

女C 特急電車のいいところはね、時間と空間が外側と切り離されるところなの。営みか
ら外れること。だからいいのよ。昔の知り合いにこんな人がいたわ。普段の運動不足
を解消するために、止まらない電車の中を歩き回ったり、連結部で体操をするんです
って。(笑) どう思う？

女B ……

女C その人は時間を有効に使ってるんだって威張ってた。

女B もったいない病なんじゃないですか？ 時間がもったいないっていう。

女C (笑) やっぱりあなた面白いわね。

女B ……

女の 寸暇を惜しんで、すべきことなんてあるのかしら。そんなの時間の亡者の考えること
とだわ。

女B だから特急電車を使うんじゃないですか？

女C 区切られた空間の中に、日常のわずらわしさを持ち込んでダメなの。そんなこと
したら、重たくて先に進まなくなってしまう。飛行機だったら落ちてしまうのよ。飛
行機は飛んで欲しいという乗客の祈りが飛行機を浮かすの。

女B いえ、そうではなくて……後ろに流れていくと、

女C でも、あなたの今座っている向きだと、前になるはずよ。

女B ああ、

女C でしょう？

女B けど、景色が過ぎ去っていくのは一緒です。

女C 進行方向は見ずに、行き過ぎた風景だけを見る。それもなかなかいいものじゃない？

女B そうですね。

女C 私、なんだか少し喋りすぎのようね。

女B あ、お邪魔してしまって、

女C そういう意味じゃないの、もう少し、そう、あなたさえ良ければもう少し座ってらして。あなた、指定席の切符をもっていないんでしょ？

女B ……

女C いいのよ、そんなこと。だからあなたさえ嫌じゃなければ、目的地まで一緒にいきましよう。

女B でも、

女C けど、ごめんなさいね、私はもう少し夢の続きを見るわ。さっき半ばだった夢。とても気になる夢だったの。あのシーンで終わってしまったのは何が何だか分からない。だから、ごめんなさいね。

女C、静かに眠りに入っていく。

女B ……あの……もしもし？

もちろん、女Cの返事はない。

女B 車窓より 見ゆるものなし 過ぎし時……季語なし。

男Aが、いつの間にか側にいる。

い。また買ってこればいいだけの話ですから。

女B マリーさん？

男A (女Cを指しながら) ああ、彼女です。あ、お酒の方が良かったですか？

女B あ、いえ、

男A じゃあ、一人で飲んでもいいですか？

女B もちろん。

男A では、遠慮なく。

女B ……マリーさんとは、ここ、この電車の中でお会いになったんですか？ たまたま

同席だったとか、

男A いえいえ。

女B じゃあ、

男A たまたま同席なんてことはあり得ないですよ。それは日本でリビア人同士がマンシ
ヨンの隣の部屋に住んでいたというぐらいのたまたまです。

女B リビア？

男A リビアはただの例えです。イエメンでもアルゼンチンでも、なんならアメリカだっ
ていい。

女B それぐらいの確率だと、

男A 知り合いが、新幹線の中でたまたま隣同士になることなんてそうあることじゃない
でしょう。というか、僕には一度もない。

女B じゃあ、ご一緒だったんですね？

男A そういうことです。

女B すみません、お二人の中に、

男A マリーとは駅で出会ったんです。大きな時計を前にしたベンチに座っていたマリー
に声を掛けたのは僕です。人を待っているようにも見えなかったので、一緒に旅をし
ませんか？ と話しかけたんです。

女B けど、行き先とか、

男A 彼女の行き先は決まってきました。この電車に乗ることも。けど、僕には行き先なん
てなかったですから。

女B 行き先がない？

男A だから、マリーと同じ行き先にしたんです。

男 A どうしました？

男 A 信じられませんか？ そうかもしれない。僕も昔のあの街で生活しているときには、そんなこと考えもしなかったですし。

女 B そんなこと、

男 A 仕事にいろいろと家を出たまま、そのままここまで来たんです。マリーに会った駅の街まで来ることも、出るときには想像もしていませんでした。そんなこんなの流れでここまで、この電車までたどり着いてるんです。

女 B え？

男 A 家を出たときから、そうでしたから。

女 B どこでも良かったんですか？

男 A だから、マリーと同じ行き先にしたんです。

女 B 行き先がない？

男 A 彼女の行き先は決まってきました。この電車に乗ることも。けど、僕には行き先なんてなかったですから。

Scene・2

女 3 爪を、爪を切りました。伸びた爪の先に、黒い垢が溜まっていたんです。だから、だから切りました。切って切って、切って切って深爪になるまで切ってみたら、爪と皮の間に溝があったんです。溝。側道のドブのようなその溝に、赤黒い垢が溜まっています。私は丁寧に爪きりの先でほじくりだしました。足の爪も切ります。形の良くない私の足の爪は、裏側に少し曲がっています。パチパチ、パチパチと力強く切らなければなりません。曲がった爪をパチパチと。親指の爪と小指の爪では厚みが違います。小指の爪は厚みがあり、幾重にも重なった層があります。両足分の爪をまとめると、少し匂います。不快な匂いではありません。愛おしささえ感じます。私の匂い、私の体臭、私の足の先に溜まった体臭。そして、次には耳掃除をしました。ゴワゴワという音を頼りに、竹の耳搔きで探っていきます。ポコツという音ごたえがあると、

ます。数回触れるだけで、臍の皺に隠された皮膚は赤くなってしまいました。白いお腹の中で赤くなったお臍。くぼんだ赤いお臍。少し唾をつけながらほじると、痛くなる前に、綺麗になります。ここまでして、一連の作業は終わりです……それから、シャワーを浴び、歯を磨き、私は、家を出ました。

Scene・3

女2 もし結婚でもしていたら、私はもっと違ったことをしたんでしょうね。

男1 やっぱり結婚すればよかったのかな？

女2 結婚していたら帰ってきたの？

男1 それは分からないけど。

女2 あなたは、いつもと同じように仕事に行った。何も変わったところがあるように見えなかった。出掛けるときのあなたの背広の肩についたフケが気になった、ただそれだけだった。

男1 少し遅い時間に家を出た。と言っても、5分かそこいらだけど。

女2 5分は違わなかったわ。

男1 3分ぐらい？

女2 ううん、遅かったとしても1分か2分よ。

男1 じゃあ、2分だ。

女2 だって、あなたが出て少しすると、小学校のチャイムが聞こえるんだもの。あの日もあなたを見送って、食器を洗っていたら聞こえてきた。だって、チャイムはいつも同じ時間になるものでしょう？

男1 先生が忘れていなければね。

女2 チャイムは先生が鳴らすの？

男1 僕は先生じゃないから、わからない。

女2 あの日も、同じチャイムだったわ。規則正しい学校生活を告げる音。

男1 僕も聞いた気がする。それとも毎日聞いていたから、あのときも聞いた気になっただけなのかもしれない。たぶん、チャイムを聞きながら駅まで早歩きしたんだろう。

あなたがまだ帰って来ていない事に気がついた。

男1 お前はよく寝る女だから。

女2 そう、私はよく寝る女だったわ。

男1 それが寂しいときもあったけど、そんなお前が羨ましくもあり可愛いとも思ってた。

女2 土曜日の夜、あなたからメールが来た。

男1 そう、最後のメール。

女2 あれが最後のあなたの言葉だった。

男1 何て送っていいか分からなくて、とても味気ないものになってしまった。

女2 あんなんじゃない、何もわからないわよ。

男A 「さようなら。元気で。」

女B 「さようなら、元気で。」

男からのメールが、女の頭の中でこだまする。

女2 私には何もできなかった。もし結婚していたら、警察に捜索願でも出したのかしら。わからない。あの日は一日中、家にいた。あなたが残していったマイルドセブンライトの煙草を前に、思考を停止して、ただその日が過ぎるのを待った。煙草はまだ3本残っていた。だから三日間、火曜日までそのままだった。職場からの電話しかなかった。あなたからはそれっきり。水曜日の明け方、お腹が空いている事に気づいて、パンを焼いて食べた。お風呂に入って、コーヒーを飲んで、職場に向かった。

男1 いつてくる。

女2 いつてらっしゃい。

男1 うん。

女2 今日は何時になりそう？

男1 わからない、いつも通りだと思う。

女2 そう。私、今日夜に打ち合わせがあるから、帰るの遅くなると思う。先に寝てくれているから。

男1 ああ。

女2 そうそう、明日の朝、洗濯するから、洗ってほしいものあったら出しておいてね。

S c e n e ・ 4

再び、“かしこ行き”の電車内。

男 A おはよう。

女 C やだ、私寝てたの？

男 A 気持ちよさそうにね。

女 C いい夢ではなかったはずなのよ。

男 A そうなの？

女 C なんか匂うわね、ウイスキー？ 私にも頂戴。

男 A 寝起きだよ？

女 C 構わないわ。

男 A、自分の飲んでいたウイスキーを渡す。

女 C あの人は？

男 A ああ、食堂車に行ってる。

女 C そう。

男 A 煙草を吸うらしいよ。

女 C だから？

男 A いや、

女 C まるで煙草を吸う人を毛嫌いしているかのような口ぶりに聞こえたけど？

男 A そんなことないよ。

女 C あなたは吸わないの？

男 A 吸ってたこともある。けど、もう辞めた。

女 C なんて？

男 A きっかけなんて些細なもんだよ。吸いたくなったらときに手持ちの煙草を切らしてた

男 A たしか、（バックの中を探る）……ああ、あったあった。

女 C 何？

男 A ああ、乗る前に買ったんだ。草から作ったとかいう、

女 C それじゃなくて、

男 A え？

女 C 旅行のパンフレット？

男 A ……ああ、これ？

女 C 日本語？

男 A ああ。

女 C 見せて。

男 A もうよれよれだけど。

女 C 旅行中に別の旅行のパンフレットを持ってくるなんて変わってるわね。

男 A 入ってたんだ、バックの底に。

女 C アジアに行きたかったの？

男 A 昔の話だよ。

女 C それなのに、全然違うところに来たのね。

男 A 遠くにしようと思ったんだ。

女 C そして、また違うところに行こうとしてる。

男 A どこでもいいんだよ。どこでも。

いつの間にか女Bが戻ってきている。

この後、女Bが座る席は女Cの向かい。

女B ここではないどこかに、ってことですか？

男A ああ、おかえり。

女C さっきは寝てしまっでごめんなさいね。

女B ここではないどこかなら、行き先はどこでも構わないと。

男A まあ、そういうことになるのかな。

女B 私、その表現大嫌いです、

男A え？

女B けど、あなたは違うものが何かわかってないんでしょう？

男A 僕は、何か捨てるのが目的じゃないんですから。それに、目的を探すことは、これまでの全てを必要としないわけじゃない。

女B じゃあ、これまでの生活はどうなるんですか？

男A 残り続けます。

女B どういう風に？

男A 何も変わらずに。

女B 何も変わらず？

男A そのままあの場所で同じようにあるんですよ、きっと。

女B それを望みながら、家を出たということ？

男A 望んではいません。そう僕の中で思ってるだけです。

女C ねえ、あなたはどこまで行くの？

女B え？

男A (女Cに) ヨハンナさん、ヨハンナさんと僕は呼んでいます。

女B そんな呼び方してなかったじゃない。

男A そうでした？ 僕はずっとヨハンナさんと呼んでるつもりでした。けど、嫌なら変

えますよ、もちろん。

女B 呼び名なんてなんでもいいですけど、

女C ヨハンナさんはどこまで行くの？ この電車を下りたら、

女B 探しに来たんです。

女C え？

女B 探しに、来たんです。

女C 何を？

女B 人です。

女C 会いに来たの？

女B ヘルンさんでしたっけ？ ヘルンさんのようにどこかに出て行った人を。

女C 連れ戻しにきたのね。

女B 違います。そんなことができるなんて思ってません。会えるかどうかだってわから

ないんですから。ただもう一度だけ会いたいです。

女C どうして？

ど、せめてもう一度あの人に会って、あの人の顔を、そしてそこで生まれる自分の感情をそのキャンバスに埋めたいんです。

女C そんなもの、最初からなかったのかもしれないわよ。

女B え？

女C 感情なんて、その場に置いてくるものだわ。その場所にしかないの。もし、あなたが次の場所でその人に会っても、生まれる感情は別物よ。その家にしかその感情は根付かない。

女B 最初から白い何も記されてないものだったと言いたいんですか？

女C いいえ、あなたがもう消してしまったといたいの。そこを出るときに。

女B そんなはずがない。私はなくしてしまったものを探しにきたんだから。

男A 僕はよく覚えていません。一緒に暮らしていた彼女と、どんな話をしていたか。どんな夢を見ていたか。そして話も夢もが日常になり、互いの存在が空気のようになくなっていったか。よく覚えている。

女C 一度その場を離れると、それは脚色されていくものだから。この窓の向こうの景色の全てを覚えていられないように、自分の覚えていたい部分だけを留めていく。

男A 覚えていたい部分じゃない。所詮受身ですから、見ることは。見てしまったものですよ。知らず知らずのうちに見させられてしまったものを覚えているんです。

女B じゃあ、あなたは何を覚えているんですか？ 今窓の先を過ぎ去っていく風景の何を覚えているんですか？

男A、窓を見つめる。

男A かすんでいくものです。遠い先に小さく、けどはっきりとあるものが近づいてきて、近くになるとかすんで見えなくなっていくものです。

女B かすんでいては見えていないじゃない。

男A 先は見えていますよ。もうすぐ牧場が来る。牛がいる。何頭いるのかはわからない。日本の牛とどう違うのか、考えてみる。そして牛をちゃんと見たことがなかったことに気づく。そうしてるうちに、ほら、牛はもう僕の背後になっている。

女B 牛は12頭です。

男A そうですか、この席からは数えられませんでした。そして覚えているのは、牛がい

男 A だけど、ヨハンナさんに言われて、窓の外を見たことは覚えていると思いますよ。
女 B ……

女 C ねえ、窓を開けてもいい？

女 B え？

男 A ああ、はい。どうぞ。

女 C （窓を開けて）気持ちいい風ね。なんだかまた眠たくなってくる。ごめんね、ヨハンナさんの方には風がこないでしょう？

女 B 風に当たりたいわけじゃないですから。

女 C そう？ 車窓より 見ゆるものなし 過ぎし時。

女 B え？

女 C 季語がないわね。

女 B ……

男 A ヨハンナさんは、まだその男の人を愛しているんですか？

女 B ……え、

男 A 一緒にいたいと思っっているんですか？

女 B わかりません。

男 A そうですか。

女 B いえ、嘘です。

男 A どういうことですか？

女 B わかっています。

男 A え？

女 B 愛してはいません。

男 A そう、ですか。

女 B はい。

男 A そうでしょうね。

女 B 過去を探しにきたんです、私は。今をどうのではなく。

男 A 何も変わらないと思っていたのは、思い違いだったのかもしれないな。

女 B え？

男 A いや、独り言です。

女2 説明放棄ですか。

男1 そういうわけではなく、

女3 彼女を置いてきたのね？

男1 そういうことになるかな。彼女と僕の想いを置いてきたことに。

女2 置いてきたんじゃない。捨ててきたんです。

男1 それは違います。捨てるのは彼女であって、僕ではありません。

女2 彼女を必要としなくなったんじゃないんですか？

男1 いいえ。僕は彼女を必要としていました。

女2 嘘です。

男1 嘘じゃありません。

女2 嘘よ。

男1 アンカさん、何故あなたに僕の気持ちと言えるんです？ 嘘かどうかは僕が決めることです。

女2 あなたが言うように、私はあなたのことを知りません。あなたがどんな風に彼女を想っていたかも知らない。だけど、あなたが彼女を捨てたのじゃなかったら、どうして家を出たんです？ 愛していたならそれまでの生活を続ければよかったじゃないですか。

男1 なんだか、責められてるみたいですね。質問攻めだ。

女3 いつも答えがある質問ばかりじゃないわ。答えない、もしくは答えられなくてもいいのよ。

男1 イエスかノーで答えられるものなら、いつだって答えられるけど。

女3 大抵はイエスでもノーでも答えられないものよ。

男1 不完全な回答では、質問者を満足させることはできない。

女3 それに、二択で答えたところで本心は伝わらないわ。伝わるのは何かがあったかなかったかだけ。どうしてという核は逃げていく。

男1 そうしたら、僕は何も本心を伝えられないな。

女2 ニコラさん、イエスノーで答えてもらえませんか？

男1 いいですよ。それなら僕にもできます。できるだけですけど。

女2 彼女を愛してたんですか？

男1 はい。

女2 それは気持ちの整理がつかなかったからですか？

男1 いいえ。

女2 他に会いたい人がいたんですか？

男1 いいえ。

女2 すぐ戻るつもりだったからですか？

男1 ……いいえ、かな。今の問いは、何も言わずに出たことに対してですか？ それと

も出てからの話ですか？

女2 彼女に何も伝えずに出たことに対してです。

男1 はい。

女2 じゃあ、出た後は戻るつもりはなかったんですか？

男1 はい。

女3 逃げていつてるわね、どうしてもが逃げていく。

女2 戻らないことに彼女は関係してないのですか？

男1 ……はい、

女2 何故かは、何故家に戻るつもりがなかったか、あなたは分かっていますか？

男1 はい。

女2 それは……

女3 あるかないか、それしか答えることはできないものよ。

女2 今、彼女に会いたいですか？

男1 いいえ。

女2 そうですか……わかりました。

女3 もういいの？

男1 アンカさんの満足する回答ではなかったでしょう？

女2 問いかけは自分にかえってくるものなんですね。

男1 え？

女2 ……窓、閉めてもいいですか。

女3 ああ、どうぞ。ごめんなさい、アンカさんの方は風がきついわよね。

女2、窓を閉める。

女2 頭が後ろに倒れこんでいくんです、世界の流れと逆に回る。

男1 逆さまの感覚ですね。

女2 できる人の感覚が知れません。

男1 逆上がりができるのと、運動神経がよくなるんですよ。手足がいいタイミングで連動させられるようになるんです。コツは、振る、蹴る、引く、巻くです。

女3 ねえ、じゃあ、振り子運動は？

男1 振り子運動？

女3 遊園地の海賊船。

男1 ああ、その振り子運動。

女3 私、海賊船の方が逆さまの感覚だと思うんだけど、どう思う？

男1 どう思うって言われても、困るなあ。

女3 もちろん、頭が下に行くわけじゃないのよ。けど、前に落ちて上がって、後ろに落ちて上がってって、逆方向を交互に繰り返す。

男1 それなら、回りながらもっと複雑な回転をするのもあるんじゃない？

女3 あれは駄目よ。あれはただ方向感覚を喪失させてるだけだもの。海賊船は違うの。上と下、前と後ろを規則的なリズムで繰り返すから生まれる逆流なの。

男1 逆流って何が？

女3 血、かな？ 全身の血。

女2 その感覚が好きなんですか？

女3 一言で言うなら、好きね。けど、そんな簡単なものじゃないの。

男1 どういうこと？

女3 身体がね、覚えてしまうのよ。落ちて浮いてを繰り返してる中で、同じ中心を巡って、時間も空間も越えていくの。

女2 逆さまになんてなってないですよ。ただ行って戻ってしてるだけです。

女3 そう、ただ同じところを同じように行きつ戻りつしてるだけよ。けど、それは外の空間に逆らってるの。逆らい続けるために動いてるの。

男1 慣性の法則には逆らってるね。運動の方向を逆にはかりしてるんだから。

女3 一度その感覚を持つと、止めれなくなるのよ。

男1 そうかなあ。

女3 顔に風を受けながら、下腹部から空気抵抗がつきあがってくる。足は自由になって

女2、立ち上がる。

女3 アンカさん、

女2 ……はい、

女3 逆上がりのポイントはね、振る、蹴る、引く、巻くじゃないのよ。

女2 ……？

男1 何？

女3 (女2に) 思考の転換。

女2 え？

女3 逆上がりしながら、地面はどこだって考えちゃ駄目なの。回るときは中心だけに集中していけばいいの。逆さまの感覚っていうのは、一定に流れていくものの中で逆回りをする時間を持つことなんだから。

女2 ……お手洗い探してきます。

女3 二両先にあるわ。

女2 はい。

女2、出て行く。

女3 この席から見る景色も同じね。

男1 イリーナの言う逆さまの感覚？

女3 人は後ろ向きに歩いたりはしない。

男1 車でも後ろを見ていると酔うからね。

女3 お墓ね。

男1 え？

女3 ほら、あのオレンジ色の建物の横。木に囲まれてるところ。

男1 どこ？

女3 もう見えないわ。

男1 意識的に後ろを見ようとすると酔いそうだ。

女3 お墓は好きよ。時間が止まってる。電車の中もそうね。

男1 乗り換えて違う電車に乗るってこと？
女3 名前を変えるの、駅ごとに。素敵な発想でしょう？
男1 イリーナが何を言いたいのか、よくわからない。
女3 この電車では捨てる。そして次の電車では欲する。海賊船と同じね。
女C この電車では捨てる。そして次の電車では欲する。海賊船と同じね。
男1 イリーナが何を言いたいのか、よくわからない。
女3 名前を変えるの、駅ごとに。素敵な発想でしょう？
男1 乗り換えて違う電車に乗るってこと？
女3 通過点よ。
男1 僕の行く街でもあるんだから。
女3 知りたいの？
男1 イリーナはその街になんで行くの？
女3 どんな街かも知らないのにな。
男1 マリーの行くところ。この電車の終着点。
女3 どこ？
男1 今はわかる。
女3 行き先を決めているのは私よ。あなたは目的地を持っていない。

Scene・6

女C 私の恋愛はいつも上手くいかない。この人となら上手くいくかな、と浮き浮きしながら寄っていても、角が邪魔してあまり近づくことができない。だけど、それがいなら私だけに限ったことではない。ねえ、お話ししようよ、と声を掛けてみても、

メエー

なぜだか、悲しい声が出てしまう。私、別に泣いているわけではないの。ああ、こんなんじゃない、私の想いは伝わらない。とぼとぼと自分の家へ帰るのよ、いつだって。いつかの帰り道、あなたの家の前を通ったとき、私勇気を振り絞って呼んでみた。

メエー

女Bと男A

女 部屋のね、大掃除をしたの。いろんな物が出てきたわ。いつ買ったかわからないものたちがいっぱい。普段使うものなんてほんの少しなんだって気づいたわ。

男 生活してるとそうなるものだよ。

女 次から次へと要らないものばかり。けど、捨てられないのよね。そう思って溜め込んできた要らないもの。気づいたらベットの上がいっぱいになってたわ。

男 好きに始末してくれていいよ。

女 え？

男 要らないもの。

女 あなたのもののことじゃないわ。

男 使えるものは使えばいい。そんなものないかもしれないけど。

女 そう、面白いものを見つけたのよ。

男 面白いもの？

女2と男1

男 いつかお前が出て行くんじゃないかと、思ってた。

女 出て行ってほしかったの？

男 まさか。

女 じゃあ、

男 そんな気がしてたんだ。

女 思い込みよ。

男 そうなんだろうね。

女 そんなこと考えたこともなかったわ。

男 怖かったんだと思う。

男 わからないよ。

女 じゃあ、ヒント。大体は年に一回必要がなくなって捨てるものね。

男 それじゃあ、ヒントになってない。どんなものでも要らなくなったら捨てるだろ？

女 けど、私は捨てなかった。

男 え？

女 私には最初から要らないものだったの。

男 どういうこと？

女2と男1

女 私が出て行くかもしれないって不安だったから、あなたから出て行ったってこと？

そう言いたいの？

男 そんなつもりじゃないよ。

女 けど、そんな口ぶりじゃない。先に死なれて一人になるくらいなら、僕が先に死んでやるって自殺するのと同じ論理よ。

男 僕たちは喧嘩ばかりしてたから。

女 日常なんてそんなものでしょう。

女Bと男A

女 持ってきたのは私だったわ。いつも私が持ってきていたのよね。

男 君が持ってきて、僕だけが使ってたってこと？

女 だから、気づかなかった。あなたがいなくなっても、普通に掃除をしても、当たり前のようにそこにあったの。

男 写真？

女 え？

男 写真、二人の。

女 私たち、写真なんか飾ってなかったじゃない。

男 そうだね……じゃあ、

女 カレンダー！。

女 あなたにもあなたのルールがあったわ。

男 そうだろうね。

女 靴下の畳み方、シャツの干し方。けど、あなたのやり方に合わせることは、嫌じゃなかった。楽しみでもあったんだから。

男 気づかなかったな。

女2と男A

女 あなたがいなくなったままだったわ。

男 カレンダーを捲るのは、僕の役目だった。

女 あんなどころにあるカレンダー、私は見ないもの。

男 そうだろうね。

女 どうして捲るのをやめたの？

男 え？

女 あなたがいなくなる前の月でとまっていたの。

女Bと男1

女 あなたは私を見ていなかったから。

男 僕は、いつでもできる仕事を、さも今しか時間がないように話すお前のことを愛しいと思ってた。

女 ひどい言い草ね。

男 ひどくなんかないよ。強い女だと思ってた。

女 (笑) 他人事みたいね。

男 お前が深夜に帰宅した日、「お腹が空いた」って甘えたことがあっただろ？

女 いつのこと？

男 会社の送別会終わりかなにかで、お前がタクシーに乗って帰ってきた日。

女 タクシーのことを責めてるの？

男 違う。僕にお前を責めることなんてできないよ。責められるのは僕の方だもの。

女 何が言いたいなの？

男 どこに？
女 週に2回ほど、最後の月だけ。
男 ……ああ、あれか……
女 あれは何？
男 大したことないよ。
女 知りたいの。
男 怒らない？
女 私が怒るようなことなの？
男 どうかわからない。

女Bと男1

男 あの日、お前は納豆を出してくれたんだ。
女 そうだった？
男 賞味期限が三日過ぎた納豆。
女 納豆でしょう？ 賞味期限だろうが消費期限だろうが、三日ぐらいなんともないわよ。
男 うちの冷蔵庫には、いつも納豆があったよね。
女 だって、あなたの好物だったじゃない。
男 そう。だからお前はいつも買い物に行くと、僕のために納豆を買った。
女 だから？
男 賞味期限を過ぎた納豆の味は、いつもと何も変わらなかった。ただ、お前は混ぜながらポツリと呟いたんだ。
女 何て？
男 「嫌だ、ネバネバがきつくなってる。」

女2と男A

女 もう時効よ、なんだって。
男 そんな大袈裟なことなんかじゃない。
女 何？

女 気にするほどのことじゃないじゃない。

男 納豆の粘りは強くないはずなのに、それなのに、お前はきつくなってると言ったんだ。

女 覚えてないわ。

男 冷蔵庫の中にいつもある。食べられることなく菌が死んでいった納豆。

女 食べたくないなら言ってくれば、他のものを用意したのに。

男 やっぱり甘えてるのは僕の方だったんだよ。

女 そんなことないって言ってるでしょう。

男 だから不安だったんだ。

女 そんなことないって言ってるでしょう。

女2と男A

女 2、4、7、9、

男 2、4、7、9、

女 11、14、17、19、

男 11、14、17、19、

女 21、24、28、30。

男 21、25、28、30。

女 いいえ、21、24、28、30よ。

男 そうか。

男1 どろりと喉に流れ込み、胃の粘液に絡みつく。口にしたかった言葉と同じ。いや、口にしたかったかもしれない言葉。そして、口にしてもどうしようもない言葉。

女B 「嫌だ、ネバネバがきつくなってる。」（女2も後を追って同じ台詞）

男A 明かすべきじゃなかったかな。（男1も後を追って同じ台詞）

女B （笑）とっても私たちがらしいわ。何が私たちがらしいのかわからないけど……1ヶ月に12個ものトイレットペーパーを使っていたのね、私たち。

女Cと女3は、互いに呼び掛けあっているが、その声が届くことはない。

S c e n e ・ 9

“あしこ行き”の電車内。

女2 揺れてますね。

女3 そう？

女2 まるで泳いでるみたい。

女3 そうかしら。

女2 ずっと小さく揺れてるので、慣れてはきたんですけど。

女3 よく見てるのね。

女2 え？

女3 私には揺れてるようには見えないわ。

女2 あ、木ではなくて、

女3 違うの？

女2 電車です。

女3 え？

女2 フワ、フワフワって小さく。

女3 (笑) 外を見ながら、揺れてますねって言われたら、外の風景のことかと思うじゃない。

女2 すみません。

女3 だからって、謝らなくてもいいのよ。

女2 はい。

女3 揺れてるのかしら？ そうよね、揺れてるのよね、もちろん。感じなくなってたわ。

女2 ……あの、

女3 何？

女2 さっきはごめんなさい。

女3 ニコラと？

女2 彼の置いてきた彼女とです。

女3 そう。けど言う相手が間違ってるわ。

女2 はい。

女3 はい、じゃなくて、ニコラに、

女2 ニコラさんじゃないんですもんね。

女3 ……（笑）噛みあってないわね。

女2 え？

女3 いいえ、なんでもないの。私は関係ないもの。

女2 ……

女3 ねえ、どうしてニコラが昔の彼女を愛していたって強調したのかわかる？

女2 ……

女3 アンカさんが嘘だと言っても、ニコラは譲らなかつたでしょう？

女2 どうして家を出たのか、私にはその理由はわかりません。でも、ニコラさんが愛していたということはわかりましたから、

女3 本当に？

女2 本当にって……？

女3 あなただが言っていたように、愛していなかったのかもしいわよ。

女2 え？ けど、

女3 ニコラは、愛していたことにしたいみたいね。

女2 したいみたいって……

女3 孤独だった。だから愛そうとした。そして、そうすることが彼女への優しさである
と思った。

女2 どういうことですか？

女3 フリをした。

女2 え？

女3 愛することはできなくても、フリならできた。彼女のことを思えばこそよね。

女2 ……

女3 けど、彼は気づいてしまったのよ。

女2 ……でも、ニコラさんは愛していたと、

女2 ……え？

女3 (笑) 私の言葉を信じちゃだめよ。

女2 ……

女3 人は嘘をつく動物。そして、自分の欲がわかっていない動物よ。だから、言葉を使
ってあるがままでなく抽象的にしてしまうの。それって嘘と似てるでしょう？

Scene・10

輪郭のない空間。

男A 夢を見なくなったんだ。

女B あなた、夢を見るのはもうたくさんだって言っていたじゃない。

男A いつも逃げている夢だった。

女B 逃げる夢は、良くない夢なのよ。

男A 良くない夢と良い夢にどんな差があるの？

女B 現実には与える影響ね、いい影響か悪い影響か。夢占いだけど。

男A 夢には、見ている心地良いものか冷や汗がでるものか二つに一つだよ。

女B それはあなたの夢の場合でしょう。私はどちらでもない現実の延長のような夢を見
るもの。

男A 捕まりそうになると、目が覚めるんだ。布団の上にいる。横には君もいる。時間を
確認してもう一度眠りにつこうとすると、隣の部屋からひそひそ声が聞こえるんだ。

テレビでもつけたままだったかと耳を澄ましてみると、違う。どうやら相手は夢を抜
け出し、ここまで追ってきたらしい。さっきまで夢を見ていて目覚めたということは、
これが本当の現実なんだと背筋が寒くなる。

女B 二重夢ね。

男A そう、夢の中で夢を見て、夢に閉じ込められるんだ。目覚めたくても、目覚めるこ
とができない。

女B そんなにストレスが溜まっていたの？

男 A ああ、ごく普通だよ。ごく当たり前のことだけを覚えている。君とのことも。

女 B 私とのこと？

男 A そう。

女 B 例えば？

男 A 日常の些細なことさ。

女 B どんなこと？

男 A 食べ物のこととか週末の予定とか、そんなことだよ。

女 B 食べ物って？

男 A 味噌汁のこととか。味噌汁のことは何度も話した。赤味噌、白味噌、八町味噌、こ
うじ味噌。

女 B なんで私たちは味噌汁の話ばかりしたの？

男 A なんてだろう。それも特別な味噌汁についてじゃない。どこにでもある普通の味噌
汁の話だ。具を何にするか。出汁をどれくらい入れるか。

女 B 覚えてなくてもいいような内容ね。意味がない。

男 A そうだね。意味なんかない。

女 B 味噌汁の話題なんて覚えてないわ。

男 A 構わないよ、そんなこと。

女 B だって私たち食道楽でもなかったじゃない。

男 A ああ、けど食べることは二人とも好きだった。

女 B お腹は空くもの。

男 A ねえ、あの日何を食べたか覚えてる？

女 B ……あの日って、あなたが出て行った日のこと？

男 A 君との最後の食事。

女 B いつもと変わらないご飯よ。それも朝食。

男 A 何を食べたか覚えてる？

女 B 言うほどのものじゃないじゃない。何も代わり映えなんかしない。

男 A そう、言うほどのものでもない代わり映えしない朝食だった。

女 B トーストにジャム、それにコーヒー。ゆで卵はあった？

男 A あったよ。グチュグチュの半熟卵。二人とも固ゆでは好きじゃなかった。

女 B 目玉焼きもそうだったわね。あなたも私も好みが一緒だった。

僕にとっては彼女の日常もセピア色だった。白いテーブルクロスについた味噌汁の染みや、変色した林檎と同じ。だが、僕はカラフルな日常なんか望んではいなかった。いつもの道を通り、いつもの駅に行き、いつもの踏み切りを渡ろうとしたら、踏み切りが下りてきた。踏み切りを待つ間、いつものように電車に乗って出勤していく自分が見えた。それはセピア色の僕だった。僕は僕を見送った。そして僕は僕のセピア色の日常から抜け出すことになった。

女C 抜け出した世界は何色だった？

男A 色なんかない。

女C 白黒ってこと？

男A 白と黒でもない。色が無いんだ。線もない。まるで夢のように。

女C あなたの夢には色がないの？

男A あると思っている、そこにいるときは。けど、無色透明なんだ。色があると思いつんでるだけなんだよ。そして色や輪郭があるということにしておく。そういうつもりしておくことで、夢は動き出すんだ。だけど、今はずっと夢を見ていない。

女C 夢の続きをみたい？

男A いや。きつとどこかで僕でない誰かが、僕の夢の続きを見ているような気がするから。

女C 彼女の隣で？

男A そうだな、そうなのかもしれない。セピア色の生活でみる無色透明な夢。

女C あなたにとって、彼女は鮮明な存在じゃなかったのね。

男A 鮮明であることがいいこととは限らないよ。

女C 彼女は嫌だったかもしれないわよ。カラフルな日常を望んでいたかもしれない。

男A それはわからない。ただ僕たちは持ちつ持たれつで、お互いを大切にしていた。それには特別なことなんか必要なかった。

女C けど、あなたはあなたを見送った。

男A 踏切が開いていれば、僕は僕を見送らなかつたらうね、きつと。

女2 どこでも良かったんですか？

男1 だから、イリーナと同じ行き先にしたんです。

女2 行き先がない？

男1 彼女の行き先は決まっていた。この電車に乗ることも。けど、僕には行き先なんてなかったですから。

女C 名前を変えるの、駅ごとに。素敵な発想でしょう？

男A 乗り換えて違う電車に乗るってこと？

女C 通過点よ。

男A 僕の行く街でもあるんだから。

女C 知りたいの？

男A マリーはその街になんで行くの？

女C どんな街かも知らないのにな。

男A マリーの行くところ。この電車の終着点。

女C どこ？

男A 今はわかる。

女C 行き先を決めているのは私よ。あなたは目的地を持っていない。

女3 あなたの行き先は決まってるわ。

男1 どこであろうと、僕には違いがない。

女2 それはイリーナさんと同じ街ですか？

女3 私の街？

女2 イリーナさんの行く街に連れていくってことですか？

女3 違うわ。それはありえないことね。

女B 私も同じ駅で降りたら、お邪魔ですか？

男A 駅は一つしかありませんから、お邪魔もなにもありませんよ。同じ電車なんですから。

女C そこで降りるしかないの。

男1 僕はイリーナと同じ街にはいけないってこと？

女3 あなたはアンカさんと同じ街に行くの。

男1 どうして？

女3 行き先は同じでも、降りるかどうかは別問題よ。

女2 イリーナさんはどうするんですか？

男A マリーは乗り換えて違う電車に乗るの？

女C そうとも言わね。

男A じゃあ、僕も乗り換えることにする。

女C 無理よ。

男A え？

女C 同じ行き先ではないの。

女B どこまで行くんですか？

女C 面白いこと聞くのね。あなたには関係ないことよ。

女3 あなたたちの時間と私の時間は違うの。

女C 始点も終点もないの。

女3 過去と未来が等しくなるって、どういうことなんでしょうね。

女C 今あるここがずっと続くの。

男A 一緒には、

男1 行けないってこと？

女B 私たちだけが、

女2 降りるんですか？

女3 捨てにきたのよね。

女C 探しにきたんでしょう？

女3 失うことはそれ以上に大きなものを持つことなの。

女C 失ってからしか探すことはできないものよ。

男1 嘘？

女2 私、捨ててきたんです、これまでの自分を全て。私には必要なくなっただんです。彼を待つという生活も彼への想いも。

男1 それは嘘ってことですか？

女3 言葉は言葉よ。

男1 ということは、嘘をつくフリですか？

女3 愛するフリと嘘の違いは何なんでしょうね。

男1 え？

女2 私、次で降ります。

女3 そう。

女2 嘘をつく人の気持ちが変わりましたから。

男1 戻るんですか？

女2 いいえ。

女3 もうすぐよ。

男A・女B え？

女2 何がですか？

女3 電車が来るわ。

女C 特急電車を追い抜いていくものはないわ。目の前に見えるのは、通り過ぎた風景ばかりよ。同じスピードで同じ方向に流れていくものもなければ、後姿を見ることがもない。見えるのは一瞬前に現在だった過去だけ。

女B 構いません。探しているだけです。

女C けど、過去には戻らないわよ。いくら特急電車だからと言って。

女B 時間を遡りたいわけじゃありませんから。

男A けど、自分の中にしかない時間を探すことはできます。

女C 誰の中にも時間はあるわ。他の誰とも違うものだけ。

男A それだから過去なんだよ。

女C 特急電車が通り過ぎるとき、全ての踏み切りが下りているわ。けど、誰かが下りて

女C 向こうから電車が来るわ。

女3 ほら、

女C 音が聞こえるでしょう？

電車がやってくる轟音。

そして一瞬の無音の後、大声で会話がなされる。

男1 逆車線を、電車が走るくらいあるでしょう。

女3 そうね、あるわね。

男A 向こうも特急なのかな。

女C ベクトルが違うから、もし一車線だったら、同じエネルギーでぶつかって終わりね。

女B すれ違うだけです。

女3 すれ違うとき、乗客同士にとっては、倍の速度になってるわ。

女2 何も見えないですね。

女C もし、この電車が光のスピードで動いていたらどうなるのかしらね。

女3 光の速度で動いていたら、倍にはならないのよね。

女C お互いのスピードで空気に摩擦が生じる。

女3 窓をあけておくと、こちらにも風が入ってくるの。向こうの電車が出した風が。

二つの電車が行き違う瞬間。

女C (女3に) あなたは、

女3 (女Cに) 何を探してきたの？

女C (女3に) 何を捨てにきたの？

女C 私は、たしかにそこにいた。

女3 私は、そこに戻ることはない。

女C 帰ることはできないの。

女3 帰ることのできない状況にしたのは私だから。

男1 風が。

男A 見えません。

女3 だって、

女B 言葉は見えませんから。

女A だって、

女2 時間は見えませんから。

女3 空気は、

女C 見えませんから。

おしまい。